Muv-Luv ～The Exclueded World～

myself

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｕｖ－Ｌｕｖ　～Ｔｈｅ　Ｅｘｃｌｕｅｄｅｄ　Ｗｏｒｌｄ～

【Ｎコード】
Ｎ６８４８Ｘ

【作者名】
ｍｙｓｅｌｆ

【あらすじ】
――神の座に転移した一人の人物。そこで自身の生い立ちとこれからなすことの全てを聞くことになった。その人物はその事実を受け入れ、心新たに戦い続けることを決意し、元いた世界へと戻る……はずであった。転移して目の前に広がるのは宇宙空間に浮かぶ一つの星――緑の大地など目に見えるぐらいしかない荒れ果てた大地を持つ地球であった。その地球でその人物は何を起こすのか、その人物が何をもたらすのか、その人物が迎える結末は幸せなのか、絶望なのか、それはこれからの物語次第である。『あいとゆうきの

おとぎばなし』、今始まりを迎える――――

お話の前に皆さんに伝えたいこと……

なぜこの作品の二次小説の筆をとるのか？それには以下の理由があります。

・何も知らない作品なのに、偶然見かけたＭＡＤ動画を初見して泣いてしまったから
・ｗｉｋｉや某動画サイトのプレイ動画やそれに準する動画を見てなんともいえない感覚を味わったから
・この作品に関する二次小説を見て感動し、自分でもやってみたいと思ったから
・これが本音であるが結末でヒロイン全員が死んでしまうのは、少なくとも自分は納得がいかないから

以上のことから、今回書くことになりました。皆さんの中には様々なご感想やご意見があると思います。「あの結末じゃなければ…」とか、「やっぱりみんなが死んでしまうのは…」とかいろいろあるはずです。ですが、この小説では『あくまで』私個人の意見かつ創作でありますので、そのようなご感想などはご遠慮くださりますようお願い申し上げます。ですが、『そこでの表現は…したほうがいいよ？』とか、『続き、楽しみにしてます』というようなご感想やご指摘は随時受け付けておりますので、どしどし送ってくださいね♪

さて、すこし長くなりましたがどうぞ最後までお付き合いしてくださりますようお願いします。

ｍｙｓｅｌｆ

第1話　孤高なる少女との出会い

～第三者視点～

「よ～しっ、やっとついた～！っと、フェイトに会う前に一度マンションに……ってここどこ！？なぜに宇宙にいるのっ！？」

衛星や小惑星しかない地球軌道上の宇宙空間に突如として現れた純白の翼を持ち、やや紫がかった腰まで届く長い髪でその身を漆黒の黒装束で包んでいる一人の少女（？）。宇宙に存在するためには宇宙服なるものが必要なのだが、彼女？はそれ以外何も纏っていない。

「ほえ～、地球って綺麗だって某ソ連の宇宙飛行士が言っていたけれど、そうでもないね。なんかユーラシア大陸が緑ではなくて岩肌が露出している土気色だし。ねえ、シュテル？」

『そうですね……すこし確認したいことがあるのですが、いいですか？』

シュテルと呼ばれた彼女？の右手薬指にはめられている一つの指輪がそう答えた。指輪が喋るというのはかなりおかしなことだが、彼女？らにとっては「普通」なのである。

「２つ？なになに～？」

『実はこの世界が最初に訪れた『なのは』の世界とはかけ離れた世界のようです』

「それどういう……いや、いいや。もう情報は把握した」

『さすが『神の代行者』たるマスターは違いますね』

「単に付加能力を使っただけだってば。にしても……これはすこし厄介だね。人が『ＢＥＴＡ』に喰われていくだけなんて…それよりも、主人公がいない――――ただ滅びを待つだけの世界ってのはさびしすぎるね」

そう、分かる人もいるかもしれないが、ここは敵性地球外起源種――通称、Ｂｅｉｎｇｓ ｏｆ ｔｈｅ Ｅｘｔｒａ Ｔｅｒｒｅｓｔｒｉａｌ ｏｒｉｇｉｎ ｗｈｉｃｈ ｉｓ Ａｄｖｅｒｓａｒｙ ｏｆ ｈｕｍａｎ ｒａｃｅ――――ＢＥＴＡのいる地球で繰り広げられる世界、「Ｍｕｖ－Ｌｕｖ」の世界なのだ。しかし本来はこの世界には主人公である「白銀武」がいるはずなのだか、彼が三週目のループでようやくこの地獄のような世界に終わりが訪れた。ゆえに、この世界が今なお存在していることがおかしいのだ。仮に、彼が他のループ上で失敗したこととしよう。しかし、たとえ一つのルートが終わりを迎えることに成功すると、静かな水面に一滴たらしたときに垣間見ることができる波紋のように、徐々に他のループへと作用していく。そのことから、この仮説は今の状況で成立しないということになる。となれば、何らかの影響でこの世界が『弾かれた』としか考えられない――――主人公が登場することがないまま物語は進み、滅びを待つという最悪な結末しかこの世界には残され

ていないのだ。

『後一つは、「アークエンジェル」も共にあるということです』

「あ、そうなの？それは助かるね～♪どうしてもこの世界には必要なものだろうしね。といっても、技術公開とかする気はさらさらないけどね♪……そゆことだから、地球に降下する前にミラージュコロイドを常時発動させておいてから降下させてね？」

『了解です、マスター。あと、アポロン様より『間違って転移したらしいな（笑）まあ、その世界では好きにしてもかまわん。むしろ有能な人物は引っこ抜いて来い。どうせ消えゆく運命の世界の住人なのだからな』とメールが着てます。』

「メール！？……なんとまあ超現代的な（苦笑）でもまあ、わかったよ」

『あと、この世界ではマスターの名前は使用できませんのであしからず』

「そうなの？んじゃ、ひとまず向こうについてから決めるとするよ。それより早く地球に行こうか」

『それじゃ、転移します』

「ん、任せた」

その言葉を最後に、彼女？の姿は霧のように掻き消えてしまった。

――――これから始まる物語は、何も悲しみに彩られたものではない。時には笑い、時には怒り、時には悲しみ、時には喜んだりとさまざまなことに身を震わせることになるだろう。……ホントの物語とは違う『あいとゆうきのおとぎばなし』、いま始まります――――――――――――――――――――――――――――

～第三者視点　ｅｎｄ～

～？？？ｓｉｄｅ～

けたたましく鳴り響く警戒警報。ここはとある国の宇宙管理局センター、日々宇宙の平和を守っている正義の者たちの集団。と、言うのは表向きで、実際は私利私欲のために働いている下種の集団の集まりにしか過ぎない。

「司令、宇宙軌道上に突如翼を持った人型の生命体が出現っ！しかし、また急に霧のようにその姿が掻き消えました」

「なにっ！？新種のＢＥＴＡやもしれん！警戒を厳に、それに関する観測データの把握と情報整理を急がせろっ！」

「サー、イエッサー！！」

「（これで手柄を立てれば、やっと連中に認められるやもしれん……これは神が与えてくれた祝福に違いない……くくく…）」

「（あ～あ、また司令が変な顔で笑ってるよ……多分手柄にできるとか考えてるんだろうなあ～……顔にでてるっちゅうにっ）」

「ん？なんかあったのか？？」

「いえ、何もありませんっ」

一応、自分の所属している現状に自分なりに楽しんでいる人もいるということも確かなようだ……

～？？？　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ～

～？？？ｓｉｄｅ～

「ねえシュテル？転移したのはいいけど、何でどこぞの城の庭に転移するの？頭おかしいの？？バカなの？？？ねえ死ぬの？？？？むしろ死にたいの？？？？？」

『あれ？……いや～、失敗しました？』

「疑問を疑問で返すな～～っ！！」

シュテルに転移を任せたのは失敗だったなあ～……それはまあ許せるけど、何で帝国城の庭なの！？お偉いさんに見つかったら大変じゃないのっ！

「……もう今度から自分でやる」

『あれ？マスターってそんなことできましたｋ（…ピシッ！）ごめんなさいごめんなさいっ！！！』

「ったく、毎回毎回人をからかうなって何度も……それより、何で人が倒れてるの？」

シュテルとの馬鹿漫才？を一通り繰り広げると、ふと目の前に一人の女の子が木の前で地面に仰向けになって寝ているように見えるが……あれは気絶したようだね……

『おそらく目の前に人が現れてびっくりして気絶してしまったのでしょうね』

気にした事もないという風に私に返事をする。だが、その声の中にすこし笑いとも取れるものが含まれていることに気づいた私はすぐさま疑問をシュテルに投げかけた。

「……まさかだと思うけど、シュテルってさ、人がいるってこと分かった上で目の前に転移と貸してないよね？」

『……チガイマスヨ？』

「……あとでオハナシ、しよ？」（ニコニコ）

『いやあああああっ！！どうかお許しをおおお～～～！！！』

「ふんだっ！もう知らないもんねっ」

それにしても、この人ってあれだよね？あのお偉いさんだよね？？あの征夷大将軍だよね？？？……風邪引かないように頭を私のひざに乗せてっと、んで翼で……っし、これで大丈夫っ！

『転移してそうそうですか？早速ヤっちゃ「……ウルサイヨ？」……なんでもありません、はい』

ったく、一言余計だってばっ！

～？？？　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ～

～政威大将軍？な少女　ｓｉｄｅ～

「ふう、すこし疲れてしまいました」

公務がひと段落したため、少し疲れていた私は一人、庭にある小さな池のそばにある屋敷の二階ぐらいまで届きそうな高さの大きな木

の元へと向かっていました。

「よいっしょっと……ふう、すこし休むことにしましょう」

そうつぶやいた私は、木にもたれかかりうつらうつらとした意識の中で頬をなでる心地よい風を感じながら目を閉じました。……しかしその直後、目が開けられないほどのまばゆい光が私を包みました。

「っ、何事ですかっ！！？？」

まぶしい光の中で何とかして目を開けた私が見たものは、純白の翼を持った一人の少女がその光の中から出てくる姿でした。なんとも幻想的な風景でしたが、私自身疲れたこともあったのでしょう。徐々に目の前が真っ暗になってゆき……そこで、私は意識を途切れさせました。

それからしばらくして、私はふと頭がなにやら柔らかい枕のようなもので支えられ、また体全体が何か温かいものに包まれているような感じがしたので、それを確かめるために目を開きました。すると――目の前に広がるのは、先ほど現れた女の子の何とも穏やかな、そしてこちらを安心させるような表情を浮かべた彼女の寝顔でした。それにしても……この子、人間ではないのでしょうね。と言っても、今人類が必死に戦っているＢＥＴＡとも思えない。かの醜い生物なら、このような神々しさはにじみ出るわけありませんもの。にしても、この羽はとても気持ちがいいです……触ってみてもやわらかくちょうど良くて、お布団にぴったり……コホンっ！！誰も聞いてませ

んよね？あ、そこの方、何か口走ったらＢＥＴＡ戦で最前線にぶち込んで差し上げますが？っと、なにやら起きちゃうみたいです……ここは普通に寝起きの挨拶だけでもするべきですよね？では……

「おはようございます、天使様？」

～ｓｉｄｅ　ｅｎｄ～

～？？？ｓｉｄｅ～

「おはようございます、天使様？」

……えっと、この子は？ってああ、思い出した。彼女が風邪を引かないように膝枕をして羽で毛布の代わりをして、すこしぼ～っとしていたときに私も寝てしまったんだった。

「おはようございます、大将軍様？」

ありゃ、この子急に怪訝な表情を浮かべちゃったよ（苦笑）……しょうがない、説明するかっ

「なぜ私のことを知っているのかっていう顔を浮かべていますね？」

「それはそうでしょう。私は貴方とははじめて会いましたのに、なぜ私のことを知っているのですか？普通はありえません」

「……お言葉ですが、『ありえないことはありえませんよ』？」

やっぱり、この子は「政威大将軍　煌武院　悠陽」だね。まあ、これから行動するには好都合かな？

「ならば、この地球からかの生物を追い出すことは可能なのですか？」

「可能ですよ？」

「っ！！？？」

私が即答したことで、しかも肯定したことで驚いてる驚いてる（笑）んじゃ、すこしあてっこをしてもらおうかな～♪

「貴方は私という存在をどう認識していますか？」

「……見た目からして、貴方は神聖なる存在であることは確かなのですよね？」

「それはもちろん」

「では……天使、ですか？」

「あたらずも遠からず、ってところですね」

「では、女神様なのですか？」

「お、だんだん近づいてきましたね」（ニコニコ）

「っ／／／／／」

あらま、なんか照れちゃった。まあいいかな？そろそろ正解を教えようかな……

「私はね、全てをつかさどる神『大神』の後継者にして『神の代行者』なのですよ」

「えっ！！？？」

「ふふっ。驚きましたか？」

「……驚きも何も、今目の前にいる貴方がそれを証明していらっしゃるのでは？」

「ん、確かにそうですね。あ、あと一ついっておきますけど、私は女の子ではなく男の子ですよ？」

「……それって嘘では？」

「何なら確かめてみます？」

「それは是h……いえ、結構です。貴方が言うならそうなのでしょう」

今この子「是非に」って言おうとしたよねっ！？逆に私が困るんだけどっ（汗）

「分かってくれて何よりです。もしも確かめると言い出したらどうしようかと思いましたよ」

「ふふ。流石に私にはそのような勇気はありません……神様？」

すこし思い詰まった様子で私を不安そうに見上げる殿下。なにか言いづらいことでもあるのだろうか……

「はい、なんですか殿下？」

「……その前に、私のことはぜひとも悠陽とお呼びください。あと、できればもう少し親しめな口調でお願いしてもいいでしょうか？」

「……わかったよ悠陽。これでどうかな？」（ニコニコ）

「…っ／／／／」

「それじゃあ、私のことも……って名前がないんだった」（汗）

「名前、ないのですか？」

「下界における名前は今の時点で持ち合わせていないんだ。どうしようかな～……そうだっ！ねえ悠陽、私の名前考えてくれる？」

「ええ！？私がですか？！」

「うん、悠陽だから私はお願いするの」

「そういわれては……仕方がありませんね。すこしお待ちください」

「ん、いくら時間掛かってもいいからね？」

あれからかれこれ１０分ぐらいはたっただろうか。私は悠陽が名前

を考えてくれている間、彼女の髪を梳いたり、頭をなでたりしてその気持ちよさに身を任せていた。対する彼女も満更ではないようで、頬を少しばかり赤くして一生懸命に考えてくれている。すると……

「――――藍」

「ん？決まったみたいだね？」

「はい。あの、藍っていうのはどうでしょうか？」

「藍、かあ」

『藍』――――――なんともいい響きを持つ言葉だろう。前の世界でもそのような名前を持っていたからだろうか、やけにこの名前に親近感が沸いてしまう。

「うん、藍、私の名前は藍だよ」

「はい、藍様」

「悠陽、ありがとう」

「いえ、これでお役に立てたのなら私としてもうれしい限りです。あと、姓のほうなのですがすこし私に考えがあるのですがいいですか？」

「ん、なにかな？」

悠陽の言う考えとは、煌武院家に養子として入ることだった。これには流石に私は無理でしょうと彼女に言ったのだが、なんでもおじい様なら大丈夫ということで、ならできたらということでいったのだが、うれしそうな表情を浮かべた悠陽が今から行こうと言い出し急遽、本家へと向かうことに……なんともまあ行動力のあるお方で（苦笑）

んで、現在本家。ここにくるまで翼は隠してあるから途中で羽を見かけた人はいないはずっ！悠陽いわく、その羽を彼女のおじい様――雷電様に見せ、かつ悠陽自身の話をすれば大丈夫とのこと。そして今現在、私は雷電様の目の前にいます。……はっきりいって、怖いです（泣）

「貴方様が大神と名乗られている方ですか？」

「そうです。証拠というのもなんですが、実際にこの背中に生えている翼を見て納得いただけるかと」

「確かに。それに、悠陽自身の話しもある。これで信じなければ罰当たりでもあるし悠陽にも失礼だ。あい分かった、貴方を我が煌武院家に迎え入れましょう。これからは煌武院　藍と名乗ってくださ

い。あと、私のことはおじいちゃんと呼んでくださりますかな！？もちろん、敬語など無しでっ！！」

「それじゃ私のことも試しにお姉ちゃんと呼んでみてくださいっ」

「ええ！？……っはい！、お姉ちゃん、おじいちゃん！」（ニコ）

「「…くっ……ブハア！」」

「ちょ、お姉ちゃん、おじいちゃん！！？？」

どうやらおじいちゃんは孫が、悠陽は弟がほしかったようです。ちなみに年齢のことを聞かれ、９歳と答えると二人は目を丸くして驚いていました。これから楽しく、そして面白く充実しそうです♪

第1話　孤高なる少女との出会い（後書き）

はい、第一話を書き終えました＾＾
ちょっとキャラが分からないところがあったんですが、まあそこは癪者の都合というものでｗｗｗ
といっても、これからは幸せな結末を迎えることができるようにがんばっていく所存ですっ！これからもお付き合いくださいね＾＾ｖ

さて次回は「主人公設定」！
いかに主人公がチートなのかがわかりますｗｗ

乞うご期待っ！

主人公設定

主人公紹介

煌武院　藍（元　アイル・ステルヴァーグ）

身長：１４０ｃｍ　体重：３４ｋｇ　性別：男の娘

髪の色：紫がかった腰まで届く長髪　目の色：藍色（神化による影響）

性格：いつも笑顔で明るい性格の持ち主。周りの人はその笑顔と容姿で癒されてしまう。しかし、自分が一度仲間や家族に危害を与える敵だと判断した場合、その敵を一切の温情を持たずに排除する。このことから彼は敵からは『冷酷なる女神』と呼ばれ畏怖され、仲間や味方の兵士からは度重なる戦いに必ず生き残り、味方を助けながらＢＥＴＡを屠る姿から『可憐なる戦乙女』と尊敬されている。

能力：？無限なる生成（アンリミテッド・クリエイション）

↓？と組み合わせて使う。材料がなくても生成可能。

？神なる知恵

↓様々に分岐する多くの平行世界の全ての知識と技術を得ることができる。

？世界を守護する力

↓大神に匹敵する世界を守るための力。気力・魔力・霊力・武術・剣術・柔術・その他諸々これに含まれる。

特殊能力：神化（神の代行者）
　　→良く言えば『なんでもできてしまう』能力。悪く言えば『チート』な能力。ちなみにこれによって姿は変えることができるが不老不死である。

主人公設定（後書き）

とまあこんな風にチートになっちゃいました＾＾；
これで面白ければいい……よね？ｗ

さて、前書きで皆さんに言い忘れていたことがあります（汗）
一つは、劇中の登場人物の階級などはｗｉｋｉなどを参照していますので分からなかった場合、僕自身の記憶を頼りにつけていきます。
もう一つは、原作で述べられていないものが劇中で述べられると思いますが、これも気にしないでください。なんたって僕の創作ですからｗ

以上でした～＾＾

次回予告！

ついに物語は動き出すっ！

第２話　斯衛軍　入隊

乞うご期待♪

第2話　斯衛軍への入隊（前書き）

遂に始まる果てしなき戦いの物語。
その中で藍は何を見つけ、何を得て、何を失って成長していくのか。
それは神でさえ分かるものは誰もいない。
なにせ、運命は自分の手で切り開くのだから……

『あいとゆうきのおとぎばなし』、いま始まります。

第2話　斯衛軍への入隊

～藍　視点～

養子入りしたあの日から今日で一週間。あれから私は濃い日々を過ごしていた。その中でまず今の自分が置かれている状況を確認した。今日の日付は１９９７年６月２２日、かの光州作戦の約一年前ということだ。んで、これから私がすることは――――シュテルによる宇宙コロニー作成や謀報活動、戦術機の開発、新ＯＳの作成、自軍基地の建築、またおじいちゃんからお願いされた悠陽の護衛の大まかな５つに分けられる。一応、私自身軍に所属したほうがいいと思っていたのでそのことをおじいちゃんに相談すると、ぜひとも斯衛軍に入ってもらいたいとのこと。そうすれば護衛の任務やら簡単に引き受けることが可能らしい。

んで、それに伴い私個人の力を見るために、急遽紅蓮大将にと実戦形式の手合わせをすることになった。なんでも、悠陽の剣の師匠であるらしい。ちなみに戦うのは格闘戦や剣術だ。あと、私自身チートともいえる体なので神化はせずに自分の力だけで戦うことにした。それでいま私たちは帝都城で悠陽と私が最初に出会った場所――――あの庭の広場にいる。

「ほう……こやつか、雷電殿？」

「そうだ紅蓮。彼が実力を測るために君と戦う相手だ」

「なあ雷電殿、いまあやつのことを『彼』といったか？」

「なに、彼は男の娘だ」

「なんとっ！……本で見たことはあるが、実物を見るのとはまったく違うではないかっ」

「そうだろうそうだろうっ！私自慢のかわいい孫だっ！！」

……模擬戦の筈だったがなぜか孫自慢大会になっちゃったよ（苦笑）最近学んだことなのだが、おじいちゃんはこのことになるとほとんどとめても無駄なのである……はあ～。

「もうっ！おじいちゃんいい加減にしてよ！今日は私の実力を測るんでしょ！？」

「おお！そうだったな。では、まかせたぞ紅蓮」

「うむ、任されたっ！」

ふう～、ようやく始まるみたいだ。紅蓮さんと共に模擬刀を――――私の場合、二降りだが――――持ってきて、お互い庭の中央で相対し

た。

～藍視点　終～

～第三者視点～

澄み切った青空の下の帝都城の大きい庭の広場で、二人は先ほどまで纏っていたゆるい雰囲気を一蹴し一人は堂々と構える壁のごとく、もう一人はその壁を乗り越える気迫を見せるがごとく、お互いすこし離れた所で向かい合い、今にも戦いの火蓋が切れようとしていた。

……しかし始まったものはいいものの、お互い一寸も動こうとはしない。それもそのはず。お互いの手打ちや癖などまったく分からず、その中で戦っているのだ。こうしているうちにお互いから殺気が放たれながらも着々と時間は進んで行く……しかし、その静寂はここまで。

「「……っ！！」」

ほぼ同時に、二人が動き出し目にも留まらぬ剣戟を繰り返し放っていく。

「ほう…ここまでやるか」

「……」

悠陽と雷電は二人が剣を交わしているところからすこし離れたところで観戦しており、剣の達人である紅蓮にあそこまでついていける藍の技量におどろき、幼いながらも紅蓮の袈裟切りや突きなどを刃で流し、時には受け止めつつも藍自身も技を繰り出して紅蓮をすこしばかりではあるが、圧倒していることに信じられないようなものを見たという風な面持ちをしている。

「っ！これで！」

「っく、良くまあ若いのにここまでやる……しかしあまいわっ！！」

藍が技を繰り出すと紅蓮はそれを受け流し、紅蓮が攻勢に出ると藍は一気に守りに徹してしまう。しかしその守りの中ですこしでも隙を見つければそこを躊躇なく突き、また紅蓮が押されてしまう状況が出来上がってしまう。いうなれば一進一退の攻防が何度も何度も繰り広げられている。

それから数十分ぐらい経ったのであろうか。いくら人間が無尽蔵な体力や気力を持っていたとしても、お互いが持っている獲物には限界が付きまとう。今の状況がそれだ。二人とも、己の使っている獲物が限界を迎えていることを知らず、最後を決めようとしていた。

「「これで終いですっ！！（終いだっ！！）」」

二人は最後に全力で、今までのどの剣戟よりも鋭い一太刀を繰り出した。———しかし、決着は着かなかった。お互いの獲物が輝を生み、そこから粉々に砕けてしまったのだ。

「むう、……これで終いか。つまらんの～」

「いやいや、こっちはもう限界ですよ？」

結局引き分けで終わってしまった模擬戦の後、お互い地面に座り込んですこしばかりの休憩をしていた。引き分けに終わったからといって二人の顔には陰りが見えない。紅蓮は新しいおもちゃを見つけ

たという風に顔をほころばせるが、一方の藍は疲労困憊でうんざりした様子だった。

「して紅蓮、藍はどうなのだ？」

「ふむ……正直に言って、わしもここまで強いとは思っていなかったんだ。最初は一揉みして帰ろうかと思ったのだが、まさか一人前に殺気まで放てるとはなっ！それに、あれぐらいの武勇を持っているは斯衛軍とはいえ左官か将官クラス。……それにあやつの目に覚悟が現れておる。並大抵なことではあれほどの覚悟を固めることはできんぞ？……雷電殿、よい孫を持ったなっ！」

「もちろんだ！藍は私の大切な孫だ。しかし、おぬしにそこまで言わしめるとはなあ～」

「これでもわしは抑えた方だぞ？……もっとも、最後は本気で行かなければならなかったが」

「それは真か？ったく、藍には本当に驚かされる……」

いかにも困った風な口調だが、その言葉を口にする雷電には清々しいくらいの満面の笑みが浮かんでいた。

「藍よ、一つ聞いてもいいだろうか？」

「？……なんです紅蓮さん？」

「……なぜおぬしは斯衛軍に入ろうなどと思ったのだ？」

ふと指にあごを当てて何かを考えていた紅蓮が静かにそう問いかけた。彼なりにもどうしてあのように強い力を持っているのか、またその力の使うべき道は何であるか、一人の武士として気になったのであろう。

「会おうですね……一つは、この帝國に住まう民の皆に安全に暮らせる場所を作るのに力を使いたいのと、もう一つは私の姉である悠陽のことや家族である雷爺を守るためですかね？」

「なんと……」

「ふむ……」

「っ……」

藍のその言葉に三人とも言葉をつまらせ、紅蓮は「なぜ十歳にも満たない子供がこのような思いを語ることができるのか」と、藍の言葉に感動を覚えると共に、自分たち大人がこのような考えを子供にさせている事に憤りを覚え、雷電は「さすが大神だ。その決意はさることながら、仁徳や覇気などが桁違いだ」と藍に対して改めて感銘を受け、悠陽は「私も守られるだけでなく、民や家族、今は離れてしまっている妹やおじい様を守る力、そして藍の支えになるための力がほしい」と藍に感化されて決意を新たにするのであった。

「うむっ、そなたの思い確かに受けとった！」

「おじい様、紅蓮殿、よろしいですね？」

「わしからは何も言うことはない。藍よ、これから共にがんばって民のためにがんばっていこうぞっ！」

「こちらからも特に何もない。……これからが戦いだ。がんばれよ、藍」

「っはい！これから今の帝國を変えていって見せます。どうか見ててね、雷爺。そして、これからよろしくお願いします、紅蓮さんっ！」

「では、簡略でありますが……政威大将軍　煌武院　悠陽、並びに斯衛軍副司令官　紅蓮醍三郎の名において、煌武院　藍――――そなたを斯衛軍中佐に任じます。その命に答え、帝國国民のため日々邁進し、平和が訪れるまで最後まで力を尽くしてくれることを願います」

「はっ！その命、確かに承りました。我らが民の住まうこの土地や民自身に、必ずやＢＥＴＡなどに脅かされることない平和を勝ち取ってごらんに入れますっ！」

こうして藍は立派に斯衛軍中佐となったのであった。だがこれは単に始まりにすぎない。日々の戦いやこれから仲間になる者達に出会うのは、これから始まるのだ。

「にしても、なぜ藍に翼が生えておるんかの？」

「「「えッ！！？？（何っ！！？？）」」」

なぜか翼が出てしまっていた藍は、それに関する事情と己の出生を

紅蓮に語ったが、難なく紅蓮はそれを理解し笑って受け入れてくれたのであった。

ちなみに、戦術機での戦闘の技能を確かめるためにシュミレーターで模擬戦をしたのだが、藍にはこの戦術機に使われているＯＳの使い方がままならず、あっけなく紅蓮に敗れたのであった。

「藍よ、このままで大丈夫かの？」

「もちろんです。僕なりの新ＯＳを現在進行形で作成していますから」

「なんとっ！？……はははっ！武芸だけではなく技術者としても天才とはなっ！本当に面白いやつじゃな！」

「ふふふっ。できたときには是非性能を確かめてくださいね♪」

「なにっ、使わせてもらえるのか？その日が楽しみじゃな～！」

こうして藍は任官できるだけでなく、紅蓮にもその才能と覚悟を認められたのであった……

～第三者視点　終～

～藍　視点～

「それでは、謁見の場で正式に任命式を行いましょう」

早めに斯衛軍の将兵にこのことを知ってもらいたいという悠陽のその言葉で、私たちは謁見の場へと足を進めていた。にしても、悠陽の行動力とか並じゃないね（汗）思いついたら即行動っ！！みたいな……見習うべきなのかもしれないけど、もう少し時間をかけて考えてほしいかな？

っと、もう着いたみたいだね…

「っと、到着しました。因みに紅蓮殿、すでに全軍の代表者には連絡を？」

「完璧ですぞ？……しかし、なぜ急に左官以上の将兵に招集をかけるのかと皆の者疑っているやつもいれば、何かあったのではないかと焦っているやつもいますな」

「それは申し訳ないですね。しかし、事が事なので……この場で養子の受け入れ、斯衛軍への入隊のことを発表するつもりです」

「しかし、反対するやつも多いのでありませんか？」

「安心するが良い、紅蓮よ。そのときは煌武院家当主の私が……」

「現政威大将軍である私が……」

『うんともすんともいえないような事実をその輩に叩き込み、地獄を見せてやるのだからな（地獄を見させてあげちゃうのですから）……』

「な、なるほどの～」（滝汗）

「……（こ、こわいよお～～！）」（ガクガクブルブル）

～藍　視点　終～

～悠陽　視点～

「皆様、今日は突然の招集にお集まりいただきありがとうございます」

やっぱり皆さん怪訝そうな表情を浮かべていらっしゃっていますね。それは仕方ありませんね。私がそうなったとしても不思議がるのは当たり前ですもの。……しかし、この後はさぞ面白いことになるでしょうね～♪

「殿下、突然の招集いかがなさいました？」

「それは今から皆さんにお話します」

ん？なぜ藍はいつも『お話』という単語で震えてしまうのでしょう？……まあいいです。

「……殿下？」

「……いえ、何でもありません。――――――さて、皆さん。いまこの場で見たことのない人物がいることはもうお分かりですよね？今日はそのことについて皆さんに伝えると共に、彼の斯衛軍への入隊式を執り行います」

『なっ……！！？？』

「ちょっとおまちくださいっ！」

「……なんですか、彩峰中将？」

「いきなり斯衛軍への……というよりも、軍への入隊は無理だと思いますが？もう少し大人になっていれば可能だと思いますが、見たところ彼は１０歳にも満たない少年の様子。法に反すると同時に倫理上の問題にも……それに、いきなりフッと現れた上に、身元が明らかでない以上そのようなこと認められませんっ！」

この人は人が言いたいことを言う前に……しかも、今から言おうとしていることを口にしようとしていたのになぜ妨げてしまうのでしょう？（怒）……あとでオシオキですね。ほら、紅蓮殿もおじい様も顔を引きつらせていらっしゃる……終わりましたね（苦笑）

「それを今から口にしようとしていたのです。意見することがないのならそれを妨げないでください」

「！？はっ！失礼しましたっ」

「んんっ！……では藍、皆さんに自己紹介を」

「はっ！……皆さん初めまして。この度、斯衛軍に入ることになりました『煌武院　藍』です」

『こっ……煌武院！？』

案の定皆様びっくりしていらっしゃる。でもたかが『煌武院』というだけでびっくりしてもらっても困りますね。――――今から信じ

られないことを発表するというのに……（ニヤリ）

「そう。名前から分かるように私の弟です」

「失礼ながらお聞きしたいことがありますっ！発言の許可をいただきたいっ！！」

「……発言を許しましょう。なんですか、巌谷少佐？」

はて、巌谷少佐はすでに光州へと出発していなかったのでは？……まあいいでしょう。のちのち彼には役立ってもらうことになりますし、説明の二度手間を避けられそうです。

「ありがとうございます。恐れながら殿下、私の記憶には殿下に弟君がいたということは聞いたことがありませんっ。いったいどういうことなのですか？」

「確かに、私の身内に弟なるものは存在しておりません」

「ならばっ！」

「ですが少佐。それ以外にも可能性として考えられることがあるでしょう？」

「それは……まさか！？」

「気づいたみたいですね。他の皆さんも一度しか言いませんのでよ

く聞いてください。この度、煌武院家は次期当主を定めるために養子を受け入れることになりました」

『っ！！？？』←藍も含む

「ふふ。さすがに言葉も出ませんか」

「当たり前ですっ！次期当主は貴方様でありましょうにっ！」

「いえ、私はそれを辞退しました」

「なっ！？何故ですかっ？」

……すこししつこいですね。ここらで突き放しましょうか

「――――それを貴方が知る必要があるのですか？彩峰中将」

「っ！？……いえ、とんだご無礼申し訳ありませんっ」

「かまいません。唯一つ、いえることがあります。」

「唯一つ…とは？」

皆さんが今までにないぐらい真剣な表情をしていらっしゃいますね。……かの作戦に関する会議でもこのように凛々しくいてほしかったです。まったく、他国のことに関するといささか不真面目になるのはどうにもならないのでしょうか……

「私の弟の藍は――――――『特別な存在』であるからです」

「……特別、ですか？」

「そうです。……彩峰中将」

「はっ」

「貴方は紅蓮殿を圧倒することができますか？」

「っ！？恐れながら、私にはそのような武勇を持ち合わせておりません！せいぜい5分ぐらい持ったほうが十分かと」

「よろしい。ならば巌谷少佐」

「はっ」

「貴方は現ＯＳを越えることのできる新ＯＳと、この世にない新しい戦術機を作ることができますか？」

「いえッ！私には到底不可能であるかと……」

「中将、少佐、それらのことができるのが藍なのです」

『っ！！？？』

「……どうやら信じていないようなので、数時間前に紅蓮と模擬戦をした映像を流しましょう」

～映像公開中～

「なっ、そこで切り返せるのか！？」

「あれはあたるぞっ！……は？普通に避けた？」

「ははは……もう見えね～よ」（滝汗）

「なんだろうこの敗北感……」

「自分よりもかなり若いのに……若いのに…子供なのに…っ」

「なにこのチート」

「ははははっ！……はあ～」

「なあ巌谷中佐」

「……なんでしょう、閣下」

「……これは夢でも見ているのだろうか？」

「残念ながら……」

「「……」」

「「……凄すぎて話にならないな」」

「お互い娘がいるっていうのに……」

「その娘よりも年下だというのに……」

「「いったいどうして……このように強いのだろう」」

～映像終了～

やはり皆さん、魂の抜けきった顔をしていらっしゃいますね～♪これで反対などする人はいないでしょう。あの二人でさえ口をあけて呆然としているのですから（笑）

「これでお分かりいただけましたか？なぜ藍が特別といえる存在なのかを」

『……』（唖然）

「分かっていただけたようなので、この話はひとまず置いておきます。次に藍の斯衛軍入隊式を行います。……藍よ、前へ」

「…はっ！」

ふふふ、いささか緊張しているみたいですね。まあ無理もありません。軍のトップが一同を会しているのですから。私だって慣れてはいますが、すこし緊張していますよ？

「煌武院　藍を日本帝国政威大将軍　煌武院　悠陽・帝國斯衛軍副司令官　紅蓮　醍三郎の名において貴君を――――――――斯衛軍中佐に任ずる。……これからの帝國や国民の未来、それは貴方の双肩に掛かっているといっても過言でありません。この先つらいことや悲しいことがあろうとも、決して挫けずに前を向いて、この帝國に住まう民のために日々邁進し、全人類の敵ＢＥＴＡからの脅威から我が民たちを救いなさい」

「……はっ！私が持てる力、この体に流れる血の一滴まで全てを用いてでも、この帝國に平穏が訪れるように粉骨砕身の精神で尽力してまいりますっ！」

「（なんとまあ強固なる決意であることか……）」

「（このような年端もいかない子供に、このような覚悟を抱かせてしまうとは……やりきれぬ）」

「藍、これからがんばってくださいね？」

「お任せをっ！」

いままで認めないやら、ありえないやらいろいろ叫んでいた人々が、藍の決意――――覚悟――――を聞いて水を打ったように静かになりました。……かの戦士である彩峰中将や巌谷少佐が凄いと思わせるほど、芯の通った決意であるのですね。私も負けていられませんっ！

「さて藍、貴方に二つの任務についてもらいます」

「はっ！」

「一つは、帝國に滞在する間はその持ち合わせている能力を用いて現ＯＳを超える新しい概念を積み込んだＯＳの作成、及び米国などにも引けをとらない新技術による戦術機作成をしてもらいます。よろしいですね？」

「もちろんです」

『んなっ！？』

流石に私が言った言葉を聞いて、できないとでも思ったのでしょう。即答して見せた藍に驚きを隠せない様子です♪……なんだか清々しいです（笑）

「しかし、それらは今から言う任務が終わってからでかまいません。もう一つの任務、これが貴方の最初の任務です。……『斯衛軍中佐　煌武院　藍、日本帝国政威大将軍の名代として今回の光州作戦に参加し、国連司令部の撤退及び民間人の救助を命じます』」

『――――――っ！？』

「はっ！その任、承りました。必ずや任務を完了させて見せましょう！」

「殿下っ！」

やはりこれには我慢ならない方がいらっしゃるようですね……でも、これは藍がぜひとも生かせてもらいと言ってくれた、藍の初陣。じゃまなどさせてたまるものですかっ

「なんですか、小沢提督？」

「なぜ死地にいかせるようなことができるのですか！？仮にも弟君であらせられますよ！？」

「安心してください。彼は死にはしませんよ」

「なぜそんなことが分かるのですかっ」

「彼は『私の大事な弟』だから分かるのです。……それに、私自身そんな死地に赴かせるようなことはしたくありません」

「ならばなぜ「聞きなさい提督っ！」っ！？」

「彼が……彼自身がこの作戦に参加することを志願したのです。一人の軍人として、一人の男の子にして、一人の子供にして、一人の帝國に住む人間として……。それなのになぜとめることができるのでしょうか」

「殿下……」

「それに……彼はＢＥＴＡを圧倒する紅蓮に圧倒していたのですよ？生き残って帰ってきてくれるに決まってるではないじゃないですか」

『……』

「……そこまでのお思いがあるのでしたら、もう何も言いますまい」

「ありがとうございます、提督」

「いえ、では…」

「と、いうことです。以上で今回の召集に関することは以上です。各々、いよいよ来月に迫った光州作戦の準備を進めてください」

「では、解散っ！」

『はっ！！』

ようやく終わりましたね。これでようやく軍人の仲間入りですよ、藍。

……貴方は絶対に死なせたりしません。この命に代えても――――貴方を守ります。だから貴方も、どうか私が挫けそうになったときや心が砕けそうになったときは、どうか私を支えてください……だから――――

どうか死なないで……――――

～悠陽　視点　終～

第2話　斯衛軍への入隊（後書き）

さて、少々遅くなりましたが第二話投稿しました～＾＾
今回のお話では、藍が遂に斯衛軍に入隊しましたね♪
これでようやく本編のほうに入っていけそうですっ＾＾b

しっかし、感想は日にちをおいてくるだろうっと思っていましたが
そろそろ感想とかが欲しいですw

～次回予告♪～

様々な反対意見が相次いだ中、ついに入隊することができた藍。
その入隊式の中で、正式に光州作戦に参加することが決まったことにより、自分の陣容を悠陽や紅蓮、雷電や彩峰、巌谷の五人に見せることになった。

次回、「第三話　降臨せし自由の剣、そして長き戦いの始まり」

その始まりに見出すものは何か。それはこれからの物語次第である……

第3話　降臨せし自由の剣、そして長き戦いの始まり（前書き）

力なきものはただの弱者なり。

知からありしもその術を知らぬものはただの愚者なり。

力と知と術を併せ持つものこそ――――――真の英雄なり。

さあ、物語の幕を開けようか。単なる一つの話に過ぎないがそれが合わさっていけば壮大な『物語』になる……そう信じて。

第3話　降臨せし自由の剣、そして長き戦いの始まり

～藍　視点～

斯衛軍に入って、あの悠陽の行動力に驚かされた日、みんなの前で行われた任官式から約五ヶ月の月日が過ぎた。来年の一月――１９９８年１月は原作の『光州作戦』が予定通り開始される日だ。何でも、国連軍・大東亜連合軍の撤退支援及び避難民の護送支援などの軍事支援が行われるらしい。今回の作戦で、私も悠陽の『御名代』として部隊を率いて参加することになった。……御名代の話が出たときはかなりびっくりして、任官式の後に悠陽と紅蓮爺に「私には荷が重過ぎる」と話したのだけれど、御名代が出てくれれば戦地に赴いている将兵の士気が挙げられるし、何よりその存在だけで国連軍に帝國軍を使い捨てさせないようにすることができるからって言

う話を聞いて、なら私なりにがんばるってことで引き受けちゃいました。

ちなみにこの五ヶ月の間、部隊と作戦の準備のほかにも自分なりに戦術機の訓練とかしてたんだよね～。その練習中に紅蓮爺に聞いたんだけど、私ってなんか帝國軍で有名になっているらしいね（汗）。なかでも――私と紅蓮爺の剣での鍛錬中の私の姿を見た人たちは『姫騎士』と、悠陽の公務中に後ろに立って彼女の護衛をしているときの姿を見た人達は『微笑みの女神』と、軍務中にシュミレーターでＢＥＴＡを撃破し蹂躙している姿を見た人たちからは『可憐なる戦乙女』と私のことを呼んでいるらしい……はずかしいよお～～～（＞＜）

最初は突然現れた煌武院家の最年少で中佐になったという人物に、多くの将兵は興味と侮蔑、嫉妬などといったいろいろな感情が混じった視線を向けてきてはいたが、それらの二つ名が軍のいたるところに広まっていくにつれてなくなり、今では通りがかるだけで普通に挨拶やくだらない話をしてくれたりもする。だから私的にはあんまり二つ名については気にしていない。だけど、『戦乙女』ってたしか将来の横浜基地所属Ａ－０１部隊の部隊名じゃなかったのかな？……まあいいかな？

んで、今日は悠陽・紅蓮爺・雷電爺・閣下・巌爺が私の乗る戦術機――ＭＳ（モビルスーツ）――を見てもらうために帝國城地下に秘密裏に建造した基地、『天照』にきてもらった。閣下と巌爺には私の正体を明かした上でこの国を、この世界を救いたいと私自身の思いを聞いてもらっ

たところ、二人は私のことを快く受け入れてくれた上に、これからともに支援してもらえるという話を聞いて思わず涙してしまいました。

「まさか城の下に地下基地が作られていたとはの～」

「びっくりした？悠陽の許可を貰って建設して、先週ようやく完成したんだよっ！」

「確かに私が許可を与えましたが……ここまで規模が凄いとは思いませんでした」

「あははっ、なんか基地なら広く作らないといけないのかなって思ってつい張り切っちゃった♪ちなみに、ここで戦術機の開発やＯＳの改良とかもするからね～」

「因みにセキュリティーのほうは？」

「ん～、あるものを所持していないと問答無用で銃殺する警備システムと不審物がないとかごみとかが落ちてないかなど基地内を警備するロボット、そしてこちらのコンピューターにハッキングすれば、した側のコンピューターを徹底的に破壊する特殊ウイルス入りのデータ防御システムとか数え切れないぐらいあるから機密保持とかは安全だよ？」

「……相手が不憫に思えてきた」（汗）

「まあ大体アメリカだろうしね～……なんか思い入れとかあるの？

閣下」

「ない。やるなら徹底的にしてしまえっ！」

「了解でありますっ！」

因みにここにはアークエンジェルも収容しているし、もう一つの悠陽用の船――『女神』と名づけられた船が、今なお建造中である。アークエンジェルのほうは、私の機体を見せてからお披露目しようと思っているところ。

それから、基地案内もかねてゆっくりと格納庫に向かっていた私たちは、数十分後目的の場所へとたどり着いた。

「格納庫にしてはでかくないか、栄二よ？」

「そうだな～……なにがあるのかが今から楽しみだ」

「……そうだな」

「ふむ、この格納庫じゃないと入らないぐらいな大きさなのか？」

「私的にはそれほど大きくないと思う…よ？」

「いやあの、私に話を振られましても…」（汗）

「そんなことはもういい。さっさと入ろうではないかっ」

雷爺はそういって一足早く格納庫へと入って行った。

「まっまつのじゃ、雷電殿っ！」

紅蓮爺も後に続いて入って行ってしまった……なんだか子供みたいな顔をしていたのは見間違いだろう。うん、そう願いたい。

「さ、早く行こうよ」

私もそういい、ハンガーへと入って行った。

「むう、何も見えないぞ？」（閣下）

「何も見えないなあ～」（巌爺）

「真っ暗です……」（悠陽）

「「ここはどこだ（なのじゃ）～～～！！！」」（雷爺・紅蓮爺）

……なにやら二人ほど迷子になっているご様子。まあライトつければOKだから放っておいてもいいよね？よし、二人があちこち行ってむやみやたらに弄繰り回さないように早くライトつけなきゃ……っと、ポチッとな♪

「それじゃ～ご開帳～～♪」

「「「「「うわ、まぶしっ！――――――――――――っ！！！？？」」」」」

「これが私の機体、『ストライクフリーダム』だよっ！」

まばゆい光に照らされた一つの機体は、その光を身に受けてさらに光り輝いていた。
5人はその姿に驚いたり見とれたり目を見開いていたりと……まあ、いろいろな表情をしていました。

「なんだこれは……」

「神々しすぎるぞっ」

「……きれいです」

「ほう…これほどとはな」

「…すばらしいっ！」

五者五様？な感想を漏らす５人。やっぱりこれはオーバーテクノロジーだと思うけど、この世界で生きていくためにはこれぐらいしないといけないよね。

「はいっ、驚くのはこれからだよ？はいスペック表。これから説明していくから読みながら聞いてね？

この機体は、型式番号：ＺＧＭＦ－Ｘ２０ＳＡ、通称ストライクフリーダム。全高２０ｍ・重量８２ｔ、この機体に使われている装甲は『ヴァリアブルフェイズシフト装甲』といって実弾の攻撃、打撃はまったく通用しないつくりになっているよ。動力源は複合核エンジン、いわゆる活動限界はないよ。この機体についている武装は全部で７つ。順に挙げていくと――――――

１：３１ｍｍ近接防御機関砲×２
２：カリドゥス複相ビーム砲
３：高エネルギービームライフル×２

４：クスィフィアス３レール砲×２
５：シュペールラケルタビームサーベル×２
６：ビームシールド×２
７：スーパードラグーン　機動兵装ウイング（ＭＡ－８０Ｖ　スーパードラグーン　ビーム突撃砲×８）

以上の７つ。特殊装備はヴォワチュール・リュミエールシステムと武装モジュール。このモジュールは超広域殲滅用兵器なんだ。

一応説明としては以上かな。何か質問とかある？」

すこし長く喋ってしまった……あ～、のど渇いた。すこし水を先に飲みたいなあ～。そう思ってハンガーの隅にある冷蔵庫に向かおうとすると、雷爺に呼び止められた。

「あの、藍よ」

「ん？なに？」

「すまん、この機体は非常識の固まりすぎて理解できん」

「……はっ、そうだっ！ビーム兵器とレールガンの実用など普通は不可能なんだぞ！？」

「いや、それ私の存在で考えてくれれば……」

「「「「「あ～……納得」」」」」

「それだけで簡単に納得させてしまう私の存在って……」

『神様でしょ？』

「そ～ですよ～だ……なんかさびしいなあ～（泣）」

「しかし、『自立型機動兵器』など聞いたことがない……なんなのだこれは？」

「実際に見たほうが早いと思うよ？今度の作戦で見せてあげるよ」

「うむ、是非見せてくれ」

「フェイズシフト装甲はこの先の衛士の犠牲者を減らすことが可能になるなッ！」

「このご時勢、最低これだけあればあとはなんとかなるんじゃない？」

「確かにな♪」

「藍君、半永久動力機関はどういうものなのだ？」

「技術者である巌爺はやっぱり気になるんだね？……はいこれ。この資料に書かれているから読んでみて」

「ありがとう藍君」

「いえいえ～♪あ、因みに私の部隊に配属する機体も決まってるから……はい、スペック表。名称は順に…ＧＡＴ－Ｘ１０２２　ブルデュエル・ＧＡＴ－Ｘ１０３ＡＰ　ヴェルデバスター・ＧＡＴ－Ｘ１０５Ｅ＋ＡＱＭ／Ｅ－Ｘ０９Ｓ　ストライクノワールの３つだよ。武装とかその他諸々その表に書いてあるから参考程度に読んでみてね。これらの機体は後に帝國軍に配備する予定だから……うずうずしてる巌爺、安心していいよ？」

「あ、いや、その……あはははは」（苦笑）

それから皆はそれぞれ資料を読んだりしてこれは使えるのかどうか、この装備の特性は、などといった新しい技術についてすこしばかり意見交換をしていた。

「あ、因みにこれらの武装や技術、能力とかは今から開発する戦術機にも転用するからね？そのことを覚えておいて。そのときはどこぞの国がたとえ鹵獲しても大丈夫なようにブラックボックス化と遠隔自爆装置をつけとくから機密保持も可能だよ？……あと、この技術は今のところ帝国内でしか使うつもりがないからそれも覚えておいて？こういっちゃ他の国に失礼かもしれないけど、私の中では帝國が最優先だから。ほら、あの時いったでしょ？もてる限りの力をずべてつかってでもこの国に住む人達に平和が訪れるようにがんばるって。……まあ、私が言いたいことはこれだけっっって、なんで皆泣いてるのっ！？」

私が言いたいことを全て口にしたところで、なぜか皆泣いてしまっている……なにかおかしなことといってしまったのかな？

「ねっ、どうしたの？」

「「「「「藍……」」」」」

「うん？どうしたの？」

「ここまで……ここまでこの国を考えてくれて…」

「ここまで…皆のことを考えてくれて…」

「ここまで……この国に住む人達のことを考えてくれて…」

「ここまで…われわれの力になってくれて……」

「「「「「――――――ありがとうっ！！」」」」」

「っっっっ！？……うん、どういたしましてっ！／／」（ニコッ）

「「「「「「――――――っっっっ！？」」」」」」（ズッキューン！）

「ん？どうしたの？」

なぜか私がお礼の返事をしただけなのに皆顔を赤くして私を見てるんだけど何かあったのかな？それに、必死に何かに耐えてる様子。気分が悪くなったのかな？……実際にすこしハンガーがシンナーくさいしね～……

「藍、よ……」

「ん？どうしたの？……顔色悪いけど大丈夫？」

「いや、それより……」

「何？」

「「「「「その笑顔は反則じゃ（反則だ／反則です）！！」」」」」

ん～、言われもないことで怒られちゃったよ（笑）って、ここで寝ないでよ～～～ッ！！それに床が血まみれに～～！？掃除大変なの

にい〜〜!!

〜藍視点　終〜

〜第三者視点〜

遂に年があけ光州作戦の実行の日が近づいてきた。１２月の時点で準備が終わっていた藍は、先に出発しようと悠陽の許可を貰おうと一人、謁見の間へと足を進めていた。

「『今回の任務は戦闘が開始され次第、基本待機しもしもの場合は戦闘介入後、速やかに帝國軍の撤退支援、及び民間人の保護を最優先に行動せよ』って思いっきり国連軍無視してるよね（汗）でもまあいいかな？向こうの作戦、私は気に入らないし……」

なにやら一人でつぶやいたり考えたりして歩いているうちに謁見の間についてしまった藍。そのまま彼はその扉を開け、早速出発することを伝えにいく……

「悠陽、私は先に動くね？」

「分かりました。しかしいいのですか？貴方には部隊がないと思っていたのですが……」

「あ、言うの忘れていたね」

「というと？」

「実はすでに自分の部隊は作ってあるんだ」

「『作った』とはどういう意味です？」

「部隊の隊員が人間じゃなくてロボットって事♪」

「なっ！？」

驚きで目を見開く悠陽と、対照的にその様子をみつめて微笑むと同時に、これから先に起こりうることに対して期待と興味、そして自らの決意をその顔に浮かべている藍。

遂に始まるＢＥＴＡとの長き戦い。その先に見えるのは完全なる勝利か、それとも……。

しかし、それはいまは分からなくてもいいのではないだろうか？どうせなら分かりきった未来の中で行動するより、いまだ分からない未来に向かって歩いていくほうが数倍も楽しいのではないだろうか？その先を紡ぐ物語が――――――――――――ついに、本当の幕を開けるっ！

～第三者視点　終～

第3話　降臨せし自由の剣、そして長き戦いの始まり（後書き）

今週話投稿しました～♪
最近物語を考えるのは好調ですね＾＾……内容は別としてｆ＾＾；
なのはのときはそれほど考えることができなかったのにｗｗ

皆さんはアニメやゲームを見たりやったりして世界観が変わったことはありますか？私は最初『なのは』のアニメを見たとき、なぜか心打たれるときがありました。なんていうんでしょう……なんかキュピーンみたいな感じ？ｗｗそれで物語の儚い？友情に感動したり、もう一度出会えてよかったねっと涙したりといろいろと感動させてもらったことを今でも覚えています。

しかし、『マブラヴ』という一つの作品に出会えて私の世界観がガラッと変わったのを感じています。……最初、その物語を耳にしたときは単なる１８禁のＰＣゲームだと思って正直なめていました。しかし、他の作者さん『なのは』の二次小説を自分の小説に役立てるために手当たり次第に読んでいたときにふと見かけた『マブラヴ』という二次小説作品。その物語のあらすじを見てみようと、ニコニコ動画に投稿されているＭＡＤ作品を見てみると、なぜか目から涙が溢れてしまいその涙をぬぐったりせずにただただ呆然と動画が終わった後でもその画面を食い入る様にみつめていたことをいまでも思い出します。

その作品に出会ってから、私はいままであまり気にかけずに『あ、そうなの？』で済ませていた国際情勢やアフリカの悲惨な状況について新聞やインターネットなどの様々なメディアを通して学ぶようになっていきました。私は『マブラヴ』という作品に出会えたことに感謝しています。その作品のおかげで、新しい観点から物事を見

ることができるようになったといっても過言ではありません。それほどまでに私に影響を与えてくれたのが『マブラヴ』という作品なのです。

……なにやら熱く語ってしまいましたね^^；

ともあれ、私が書き上げているこの作品の二次小説をご覧になっている人たちのなかでも、私と同じ感想を抱いた人がいるかもしれないですね。そのような人たちがいてくれれば私としてもうれしいです^^

――――すこし画面が霞んで見えないんですがどうしましょう？ｗ

なぜか書き上げながら涙がでちゃうｗｗｗ

ごしごし……っと。

さて、長くなってしまいましたが次回予告です♪

いざ初陣のとき。しかし、一行に最初の危機が訪れてしまうっ！

そう切り抜ける、藍！

というわけで次回「第４話　舞い降りる天使」

乞うご期待♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6848x/

Muv-Luv ～The Exclueded World～

2011年11月8日03時04分発行